アスターの手記

煌兎

初めに今からここに記すことは現実のようでありながら非現実のようであり、しかしながら紛れもなく現実のことである、ということを述べておく。それは一見すると美しく儚く憐れな……しかし、その内にある種の狂気を孕んだ一人の女性の人生の物語である。

そして一つ、この手記の内容の一部においては私が直接見聞きしたことではないため私が得た情報を基に想像で記している部分があるということを断っておく。それゆえ、あやふやな部分や信憑性に欠ける部分があるかもしれない。

だがここに記す内容は実在した女性の人生の物語であり、現実に起きた出来事であり、紛れもなく真実である。

◆◆◆

物語の主人公はアイリス・デンファレという女性である。

一八三九年、上流階級であるデンファレ家の長女としてアイリスは生まれた。もっとも、長女と言っても年の離れた三人の兄がいたため実際のところ四番目の子供であった。とはいえ、デンファレ家にとっては初めての女の子。両親や年の離れた兄たちのみならず、親戚や使用人たちにも愛されていたという。

残念ながら彼女の幼少期について私が得ることが出来た情報はこれだけである。というのも、私が彼女のことについて詳しく調べ始めた頃には彼女の幼少期を知る人物の多くは所在が分からなかったり、あるいは既に亡くなっていたからである。

勝手ではあるが話を進めよう。

月日は流れ、アイリスは愛らしい子供から美しい女性へと成長した。ビスクドールの様な透き通る白い肌。翡翠の様な深い緑色の瞳。絹糸の様な琥珀色の髪。庭を彩る薔薇を思わせる薄紅色の唇……彼女を形作る全てが美しく、また一つの違和感もなく調和していた。まるで誘蛾灯の様に多くの男性たちは訳もなく彼女に惹かれ、彼女の虜になった。私自身当時の彼女の写真を見て心が躍ったのを覚えている。

そんな彼女である。夜会の誘いも数えきれない程あり、その会場で求婚されることも少なくなかった。が、彼女が求婚に応えることはなかった。

そんな中、アイリスは一人の男性と出会った。彼女より五歳年上で、名はハイド・ランジアという。彼女と同じく上流階級の育ちで、端正な顔立ちと言葉の端々に知性を感じさせる喋りに多くの女性たちが心を奪われていた。彼女も例外なくその女性たちの中の一人だった。彼女が一九歳のときである。

その日はハイドが主催する夜会でなかなか大規模なものだった。が、大規模であるということはそれだけ人がいるということでおのずとアイリスに求婚してくる男性の数も増えてくるというもので……少しでも静かにできる場所にと思いバルコニーへ出た。

バルコニーには先客がいた。ハイドだ。夜会の主催者であるはずのハイドが何故こんなところで一人でいるのか。疑問が沸き起こったがその答えはすぐに分かった。会場内では彼女と同じく求婚の嵐に巻き込まれていた。つまり彼女と同じで少しでも静かにできる場所にと思って来たのだと。

バルコニーにはアイリスとハイドの二人だけ。二人に迫る人たちは皆ホールで食事を楽しんだりダンスに興じたりしているはず。女性たちが皆恋い焦がれる男性と話すまたとない機会。アイリスは意を決して声をかけた。

「お疲れですか？」

するとハイドは、その声に反応して振り返り……

「貴女程ではないですよ、アイリス嬢」

まるで彼女が求婚の嵐から逃げるためにここに来ると分かっていたかのように答えた。そして彼女の頭を撫でながらこう言った。

「残念だけど私はそろそろ戻らないといけない。貴女とは後日ゆっくりと紅茶でも飲みながらお話しがしたい」

ハイドは一通の封筒を内ポケットから取り出すと彼女に渡しそのままバルコニーを後にした。その封筒の中身は彼女にとってあまりにも幸せな時間への招待状だった。

それからはアイリスにとって幸せの連続だった。

夜会から数日後、彼女はハイドと二人っきりのお茶会を楽しんだ。そしてお茶会が終わる頃、「次の招待状だ」とまた一通の封筒を渡された。その次も、その次も……二人は何度となくお茶会を開いてはその度にお互いの距離を近づけた。

そんな関係を続けて一年程経った頃……アイリスとハイドは永遠の愛を誓う仲になった。

お互いの家が上流階級であったこともあって周りに反対する者がいなかったため、当時にしては珍しい恋愛結婚だった。

そこからの数年間……その間には男の子も一人授かった……アイリスは幸せに包まれていた。

幸せは突然崩れた。

その日、アイリスは「たまには自分で用意してみたい」と言って自ら湯を沸かし紅茶を入れる支度をしていた。そこへ彼女の息子がやってきて……一瞬だった。

次の瞬間には調理場の床で泣き声とも呻き声とも分からない叫びをあげながら顔を押さえうずくまる彼女と彼女の腕の中で泣き叫ぶ息子がいた。

ほんの少し彼女が目を離した隙に息子が好奇心からヤカンの取っ手を掴み引っ張った。中には沸騰直前の湯。彼女は自分の息子を守るため咄嗟に息子を抱き込んだ。結果、彼女はヤカンの中の湯を全身に浴び大火傷を負った。その火傷は顔から背中にかけて広範囲に及んだ。

幸いにも命に別状はなかった。が……彼女の美しい顔の半分近くが赤く爛れてしまった。彼女は自分の美しさを見せつけるような態度こそとってはこなかったが少なからず自分の美しさに自信を持ち、誇りを持っていた。その美しさが見るも無残な状態になってしまったとき……彼女の中で一つの狂気が芽を出した。

狂気の芽は直ぐに見える形で現れた。

火傷の治療が終わり、自宅に戻ったその日に彼女は屋敷中の鏡という鏡を全て割り、処分した。

「これで醜い姿を見なくて済むわ……アハハ……アハハハハ……」

美しい手が鏡の破片で傷付き紅く染まることも気にせず、一人、狂ったように笑いながら屋敷中の鏡を割り続けた。

そして狂気の芽は一気に成長した。

まるで失った美しさを補うかのように美しいモノや綺麗なモノを手に入れることが出来るなら出来るだけ全て手に入れ始めた。

ドレス、バッグ、アクセサリー、陶磁器、ビスクドール、宝石、絵画、彫像、花……それらが彼女の部屋を埋め尽くした。彼女が美しいと思うモノだけで埋め尽くされた空間は確かに美しかった。が、同時に狂気が渦巻いていた。

「これも、これも、これも、これも、これもこれもこれもコレモコレモコレモコレモ……」

異常の一言では表せないまでに歪んでしまった彼女は美しいモノに囲まれることで自分という存在を保とうとしていた。まるで大きな穴でも開いてしまったかのような心を埋めようとした。だが、彼女の心の穴はどれだけ美しいモノを綺麗なモノを集めても埋まらなかった。

「どうして？　何が足りないの？　このドレスだって、この指輪だって、このビスクドールだって、全部全部美しいのに！　何が、何が足りないの！」

そして、何が足りないのかを見つけた。

同時に狂気は花開いた。

彼女が求めていたのは過去の自分と同等の美しさを持つモノだった。それはドレスでもなければ指輪でもなく、ビスクドールでもなかった。彼女と同等の美しさを持つモノ……一つしかなかった。愛する夫……ハイドである。

「ハイドなら……きっと私の心を埋めてくれるはず。」

「だってあの人は美しいもの。」

「私が見てきた中で一番美しい存在だもの。」

「美しいハイド。」

もう彼女の思考は止まらなかった。自分の心を埋めてくれるのはハイドしかいない。そのハイドを自分の部屋に、他の美しいモノ綺麗なモノと一緒に置かなくてはいけない。そのためにはどうすればいいか。

「　　」

申し訳ないが何度書こうと思ってもこの言葉だけは書けなかった。書こうと試みてはみたがその度にペンを握る手が震えてしまった。なので察して頂けるとありがたい。

話を戻そう。

その日の夜、彼女はハイドを自分の部屋に招き入れた。ハイドが部屋に入って1時間ほど経ったとき……屋敷に耳を覆いたくなるような絶叫と壊れたオルゴールのような笑い声が響き渡った。それから数分後、笑い声も消え静寂が広がった。

翌朝、屋敷には警察の人間が出入りしていた。彼らはアイリスの部屋を見て絶句した。

純白の壁には真っ赤な真っ赤な大輪の花が咲き、その下でアイリスが集めた数々の美しいモノ綺麗なモノに囲まれ寄り添うようにアイリスとハイドが死んでいた。そして、不思議なことに二人とも微笑んでいた。アイリスの手元には凶器と思われる包丁が一本、転がっていた。

警察は二人が何らかのトラブルを抱え、無理心中をしたと判断した。

一八七二年、アイリスは三二年間の人生を終えた。

◆◆◆

何故二人は微笑んでいたのか……ここからは私の想像である。

アイリスがハイドを　たというのは間違いないだろう。そして、その際アイリスの手元にあった包丁が使われたのも間違いないだろう。それなら恐らく痛みと恐怖に顔を歪めているはずである。だが、ハイドは微笑んでいた。それはきっと彼がアイリスを深く、深く愛していたからではないだろうか。そしてきっとその瞬間、これから訪れる運命がどんなものであれ受け入れ、それでもアイリスへの変わらぬ愛を貫く決意をしたのだろう。

一方のアイリスは自分の心が埋まり、もう全てが満たされ、幸せに浸りながら自らの人生に幕を引いたのだろう。

そして最後に、私は謝らなくてはいけない。

私自身は特に何かをしたという意識があるわけではない。が、幼いころ無意識に種を蒔いてしまったのは紛れもなく私である。私が蒔いた種が結果として一人の女性の人生を狂わせてしまった。だが、そのことは今の今まで誰にも言うことはできなかった。言ってし

まうと非難されるのではないかと怯えていたからだ。しかし、それももう終わりである。何故ならもう怯える必要がないのだから。

だから、今ここに記そう。

愛するお母様

私を庇ったがために貴女は苦しみ嘆き、そして自らの人生の幕引きを貴女自身にさせてしまい申し訳ありません。今は直接お叱りを受けることはできませんが、もう暫くすれば私もそちらに行くことになります。そのときは甘んじてお叱りを受けようと思います。

愛するお父様

貴方を巻き込んでしまい申し訳ありません。お父様のことですからそちらでもお母様を愛し続けているのでしょう。お母様からお叱りを受けた後、三人で昔の様に笑い合えたらと思います。

貴方たちの息子　アスターより

私の自己満足でしかないこの手記を手に取るものがいるとは思えないが、もしかするといるかもしれないので記しておこう。

ここまで読んでくれて感謝する。

アスター・ランジア

一九三四年七月　著

END